あるむぜお97

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 97　2011年9月20日

撮影：影山昇

目次

1-2 渡り鳥ってナンダ？
②渡り鳥はどこから来るのか？

3 展示会案内
企画展　大西浩次　星景写真展ー時空の彩ー

4-5 ノート　元弘の矢の根

6 知る人ぞ知る！　府中ゆかりの人物
②内藤重喬

7 最近の発掘調査
白糸台でムダ堀の延長部を発見？

8 収蔵資料あれこれ
縄文時代の珍奇な石製品

身近な自然を再確認する目的でスタートした展示会「あしもとネイチャーワールド」シリーズの次回(来年1～3月)テーマは渡り鳥を予定しています。本誌の表紙では、府中で観察できる冬鳥の代表種を市内在住の影山昇氏（府中野鳥クラブ）の写真で4回にわたり紹介します。

冬鳥図鑑 ②　アトリ

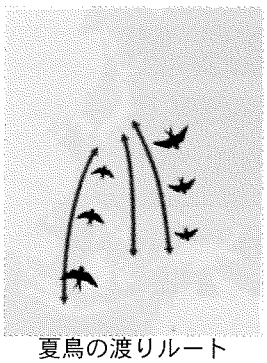
アトリは、時に数万羽にも及ぶ大きな群れでやって来る冬鳥です。名前の由来も「集団の鳥」、つまりは「集まる鳥：あつどり」から付いた名称と考えられています。博物館の園内でも60羽以上の群れで観察されています。飛来した直後は山地で木の実などを食べて過ごしますが、山が雪に閉ざされるようになると平地に下り、人里にも出現するのです。

渡り鳥ってナンダ？

② 渡り鳥はどこから来るのか？

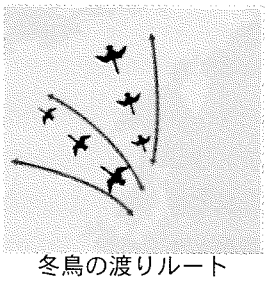
日本では移り変わる季節ごとに、色々な渡り鳥を観察することができます。ほとんどの地域が温帯に位置している日本は、渡り鳥にとって絶好の旅先だからです。渡りという行動は、餌の問題に起因する説が有力であることを前号で述べていますが、これを踏まえて季節ごとの渡り鳥がどこから日本にやって来るのかを考えてみましょう。

繁殖のために、暑さの厳しい南の国からやって来るのはツバメやカッコウなどの夏鳥です。暑すぎない日本を避暑地として選ぶのは理解できますが、食糧面では南の国でも十分賄えるだけの昆虫が生息しています。それでも体力を消耗し、危険度の高い長距離を渡って来るのは何故でしょう？それは、温帯地方が春から夏にかけて、昆虫などの繁殖期を迎え、生物量が一気に増加するからです。自身の餌の確保だけであれば移動しなくても事足りてしまいますが、繁殖期を迎える鳥にとっては育雛のため、越冬期よりも豊富な量の餌を求めてやって来るというわけです。やがて子育てが終わると、夏鳥は秋には南へと戻って行きます。



夏鳥の渡りルート

秋になると、冬鳥が日本で越冬するために北方から渡って来ます。コハクチョウ、ツル、ジョウビタキなどが代表的です。彼らが生まれ育った北の国は、冬になると雪や氷に閉ざされ、餌もほとんど採れなくなります。このため温暖な日本にはるばるやって来て冬を越すのです。春になると繁殖のために北へ帰るのですが、寒帯地方の夏は高緯度のため、昼間の時間が長く、春から夏にかけては温帯地方以上に生物量が増加します。これらをフルに利用して繁殖するために北へ帰ると考えられています。



冬鳥の渡りルート

また、大半が日本より北の国で繁殖し、南の国で越冬する旅鳥は、最終目的地が日本ではありません。春と秋の長距離旅行の途中で休息地として日本に立ち寄るわけですが、シギやチドリがその代表格となっています。飛来した旅鳥は、干潟や水田を餌場に利用しながら、短い期間滞在します。長距離を渡る種類にとっては、さらに旅を続けるためのエネルギーを補給するために、日本は大変重要な休憩場所となっています。

渡りのルートについては皆一様ではありません。風や地形などが大きな影響を与えています。小型の鳥類では平野部で低く、日本など起伏のある土地では高度が高くなります。地形により飛ぶエリアを変えているわけですが、たとえば、タカの仲間では空にレールが敷いてあるかのように、決まった経路を毎年たどります。反して同じ場所で冬を越したカモ類は１羽ごとにばらばらです。これは生息環境の違いが渡り行動に反映しているものと考えられています。カモの暮らす湿地などは洪水等の影響で変化し易い環境にあるため、その都度良い場所を選択して飛来する柔軟性が要求されます。逆にタカ類の暮らす森林環境は水辺環境よりも安定しているため、同じ場所を目指して飛んで来る方が無難なのであろうと推測されます。

こうした渡りの追跡は、かつては足輪を使った標識調査に頼っていましたが、現在では人工衛星を駆使した確実な追跡が可能になりました。発信器も軽量化され、飛翔力のさほど強くない鳥でも装着でき、太陽電池の発達で電池切れもなく１羽の動きが追えるのです。様々な種類の渡り鳥がどのようなコースをたどり移動するのか、より精度の高い方法で、詳細なルートも明らかになってきているようです。

（中村武史）

渡りルート図出典：『空の旅人～渡り鳥の不思議～』
（2010年 ﾐｭｰｼﾞｱﾑﾊﾟｰｸ茨城県自然博物館）

展示会案内

企画展 大西浩次
星景写真展
―時空（とき）の彩（いろ）―

9月17日(土)～12月4日(日)
会場：博物館本館2階 企画展示室
観覧無料

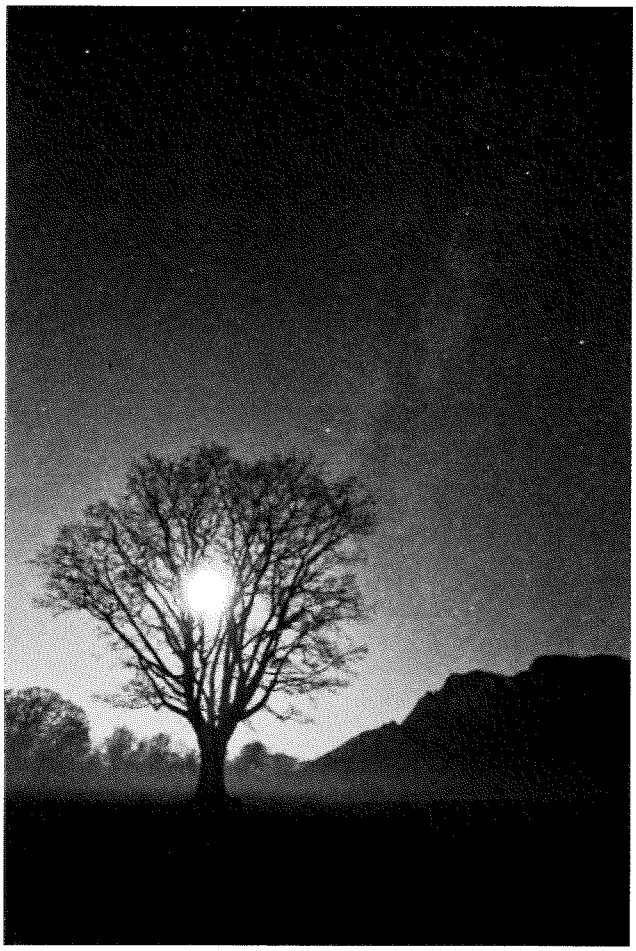
みなさんは、きれいな星空を見たことがありますか？生活が豊かになるにつれて、街が明るくなり、宇宙から見ると夜の関東平野などはまぶしいぐらいの光を出しています。

そんな中、天体写真家の大西浩次さんは、小さい頃に眺めた星空が、すでに街の近くに全くなくなっていること、山の上に行っても、遠方の街明りが見えて、以前見た星空がなくなっていることに気づき、失いつつある「星空」を今のうちに記録しないといけないと考えて、撮影し始めました。星空と地上の景色を同時に記録するのは大変難しいことですが、試行錯誤の末、小さいカメラに低感度リバーサルフィルムを用い、薄明りや月明りを光源にして撮るスタイルにたどり着きました。

今回の企画展は大西さんが撮影した、星の風景写真展です。空に輝く星々と地上の風景が織りなす神秘的な光景をお楽しみください。

（本間隆幸）

はやぶさの空



樹の曲・春を待つ樹

大西浩次ギャラリートーク

美しい星景写真の数々はどのように撮影されたのでしょうか。それぞれの写真について、撮影時の状況を交えて解説します。

日　　時：10月30日(日)14：00～
場　　所：博物館本館2階 企画展示室
参加方法：当日自由参加
定　　員：30名

大西浩次＜プロフィール＞
1962年6月富山県生まれ
長野県長野市在住 博士（理学）
長野工業高等専門学校一般科教授、日本星景写真協会監事、国際天文学連合(IAU)会員（コミッション8）、日本天文学会、日本天文学会ジュニアセッション実行委員、天文教育普及研究会、日本天文協議会運営委員
2009年世界天文年の年に初めての星景写真展「時空の地平線」を行う。以降全国各地で写真展を開催。

NOTE

元弘の矢の根

花木 知子

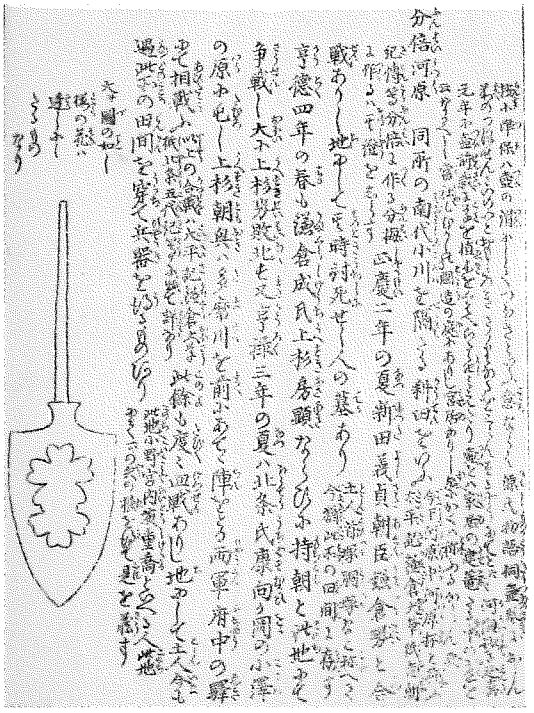


写真１ 『江戸名所図会』のうち「分倍河原」部分

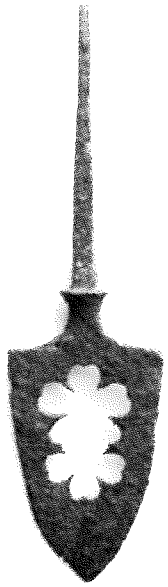


写真２ 「元弘の矢の根」

『江戸名所図会』に描かれた「矢の根」

天保５年（1834）に刊行された、江戸の地誌『江戸名所図会』巻之三の「分倍河原」の項には、田の中から出土した兵器として「矢の根」の図が描かれています（写真1）。「矢の根」とは鏃のことで、図の上半分に描かれている茎という細い棒状の部分を箭（矢の幹）の尖端に差し込んで使用します。

『江戸名所図会』は、この「矢の根」の所蔵者について「此地小野宮内藤重喬といへる人、此地にて一ツの矢の根を得て是を蔵す」と記しています。内藤重喬は、本宿村小野宮（現 府中市住吉町）で村役人を勤めていた内藤治右衛門家の４代目で、狂歌を通して大田蜀山人等と交流があった文化人です（8頁でも重喬について紹介しています）。

内藤治右衛門家の資料は、平成18年（2006）度に当館に寄贈され、現在整理作業を進めています。この資料群のなかに、『江戸名所図会』に描かれたものと思われる「矢の根」が残っていました。写真2がその写真で、「元弘の矢の根」と記された和紙に包まれ、箱に入れて保存されていました。『江戸名所図会』に描かれている図と形状を比べてみると、外形も、鏃身に彫られている模様の形も、非常に良く似ています。図の上部には、「大サ図の如し、桜の花ハ透しにしたるものなり」という一文が添えてあります。試しに図の大きさを測ってみると、茎は長さ6cm、鏃身は長さ6cm、広い部分の幅が3.2cm。一方、現物はどうかというと、茎は長さ6.2cm、鏃身は長さ6.8cm、広い部分の幅が3.5cmですので、若干異なるものの、ほぼ同じ大きさです。これらのことから、内藤治右衛門家の資料群に残された「矢の根」は、『江戸名所図会』に記載されたものであると言ってよいと考えます。

「矢の根」を見た文化人たち

『江戸名所図会』は、江戸の雉子町（現 千代田区）で名主を勤めていた斎藤幸雄・幸孝・幸成が三代にわたり編んだものです。まず幸雄が寛政年中（1789～1801）に江戸および近郊を実

地調査して草稿を作成し、幸孝がその草稿に手を加えて新たに江戸近郊部分を増補したものに、幸成がさらに校訂を加えて刊行しました。幸雄は「矢の根」が掘り出された年に没していますから、『江戸名所図会』の「矢の根」の図が実物を見て描かれたものだとすると、内藤家に調査に訪れたのは、幸孝の可能性が高いと思われます。もっとも管見の限り、内藤家の資料の中に幸孝が訪れたという記録はありません。

『江戸名所図会』の他にも、この「矢の根」について記載された書物があります。平田篤胤・伴信友とともに国学の三大家とされる小山田与清が著し、文化14年（1817）に刊行された『擁書漫筆』です。与清はこのなかで、狂歌師の小川真顔が「矢の根」を見て詠んだ「梓弓 春の田に得し矢の根とて やさしや花を すきいれにけり」という歌を紹介しています。

与清と真顔については、真顔が文化6年に、与清が文化8年に内藤家を訪れて「矢の根」を見たことが資料中に記されています。また真顔に関しては、重喬とその子重英が記した日記から、文化6年10月11日から14日まで滞在し、13日に「矢の根記」を書したことがわかります。この「矢の根記」に、『擁書漫筆』で紹介された歌が載っていますので、与清が訪れた際に「矢の根」とともに見せられたのかもしれません。

「矢の根」は元弘3年の合戦のものか?

最後に、元弘3年（1333）の分倍河原合戦のものと伝えられる、この「矢の根」について、少し検証してみたいと思います。

まず、合戦に使用されたものなのかという問題があります。矢はその用途から、軍陣用の征矢、狩猟用の野矢、歩射の競技用の的矢があり、鏃の種類も異なります。合戦に使用する征矢の鏃は、射通すことに適した細長い形状をしています。ところが内藤家の「矢の根」は鏃身が扁平ですので、征矢ではありません。この形状は、射切る機能を持つ野矢に属するもので、平根という種類の鏃です。平根は中央に透かしを入れるのが普通で、内藤家のものにも、桜の花が二重にほどこされています。

それでは、征矢でないということは、この「矢の根」が合戦で使用されたものではないかというと、実はそうとは言い切れないのです。矢を入れる箙の中には、表差といわれる征矢以外の矢があり、戦闘の最初に敵陣に向けて射合う嚆矢として用いられました。嚆矢の多くは、狩俣という鏃身が二股に分かれている鏃に、矢を射ると音の出る鏑（木や角の先に数個の穴を開けたもの）をつけたものですが、狩股のほかに平根も用いられました。つまり、内藤家の「矢の根」が何らかの合戦の際に、嚆矢として使用された可能性は十分にあるのです。

次に、その合戦の年代ですが、重喬が記したと思われる「元弘矢之根記」という随筆には、これを所蔵した経緯として、享和元年（1801）5月に分倍河原の田んぼの中から農民が掘り出して所持していたものを、譲り受けたと記されています。重喬はこの出土場所と元弘3年5月15日・16日に行われた、新田義貞軍と鎌倉幕府軍の合戦を結びつけたのでしょう。もちろん、その時のものである可能性は十分にあると思います。しかし、この場所が舞台となった合戦は他にもありますから、元弘のものと断言するのは難しいようにも思います。

実際、『江戸名所図会』『擁書漫筆』とも、「元弘の矢の根」とは記載していません。前者では、元弘3年の合戦に加え（北朝の暦を用い、正慶2年と記載）、享徳4年（1455）の鎌倉公方足利成氏軍と関東管領上杉房顕を中心とする軍勢との合戦などを挙げ、度々血戦があった地から出土した「矢の根」であると記すにとどまっています。また後者においても、その形状について考証しているものの、時代について言及していません。両者とも、元弘3年の合戦と断定するに至らなかったものと思われます。

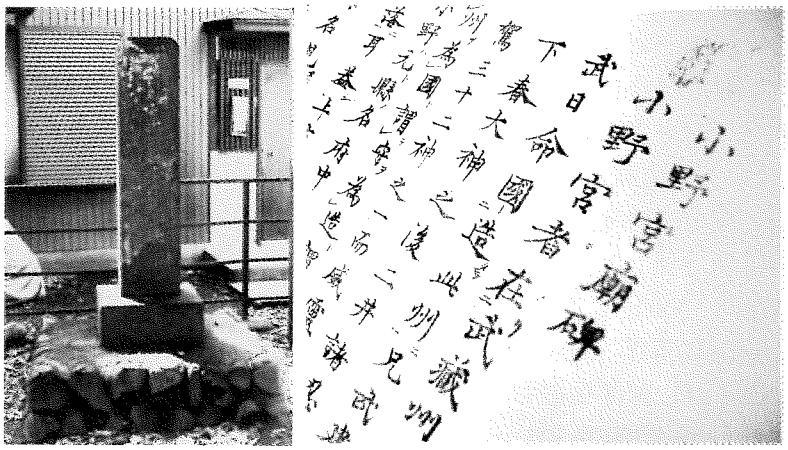
おわりに

内藤家の「矢の根」について、種々検討してきましたが、私たちにとって一番重要なことは、江戸時代後期の書籍に記載された鏃が、現在に残っていることだと思います。当時の人々が14～15世紀の合戦に想いをはせて述べている様々なことを、21世紀に暮らす私たちがまた、現物とともに考証することができるのです。ここに綿々とつながる人間の生活を思い、地域の歴史を身近に感じる人は多いのではないでしょうか。

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

②内藤重喬

市内住吉町3丁目（周辺は現在でも小野宮という旧称で呼ばれる）に鎮座する小野神社境内の本殿裏手に高さ2メートルほどの石碑があります。正面には「小野宮廟碑」とあり、残りの三面には、府中という地名が武蔵国府に由来し、「小野」は府中と名のついたころからの地名であることや、神社が一宮と呼ばれていること、この神社が平安時代につくられた『延喜式』に載る由緒正しい神社（延喜式内社）であることなどが詳細に記されています。



小野宮廟碑とその刷物の一部

現在では多摩市一宮に鎮座する同名の小野神社が「武蔵国一宮」、そして「延喜式内社」に該当するという説が有力です。ですが江戸時代には小野宮の小野神社こそがそれである、という説がさかんに紹介され、その根拠の一つとして小野宮廟碑の存在がありました。

碑文によると、この碑が建立されたのは寛政7年（1795）のことで、中心になって建てた人物の名は「内藤重喬」と記されています。この碑は江戸時代に刊行された複数の書物に紹介されていますが、これは重喬（1762-1843）が碑文を刷物にして頒布したことによるようです。小野宮廟碑に記されている、古代から続く（とされる）小野宮の由緒の顕彰に、この重喬の力が強く働いていたのです。

彼が5代当主であった内藤冶右衛門家は小野宮開発時に最初に住み着いた７軒の家のうちの一つとされています。江戸時代は代々医者、歌人、学者を輩出した家であり、重喬以降にも内藤重英、重鎮といった人物がいました。現在も続く内藤家には、重喬からはじまる（それ以前は焼失と伝えられている）、彼らが著した随筆、紀行文、収集した典籍といった膨大な資料が残されていることが近年わかりました（現在当館で整理中）。なかには日々の出来事を連綿とつづった日記「県居井蛙録」もあります。これらの資料は、小野宮から見た江戸時代後期のくらしや事件を詳細に語ってくれる貴重な資料といえます。

重喬自身は歴史的な事件に大きく関与したわけではなさそうですが、医者であり、国学者でもあり、「久練堂橘良」とも名乗り詩歌もたしなんでいました。そのため、六所宮（現 大國魂神社）神主の猿渡氏など府中市域はもちろんのこと、江戸近郊の文人たちとも交流があり、『擁書漫筆』（1817）や『江戸名所図会』の巻之三（1834）などの書物にもその名が残っています。狂歌師として知られる大田蜀山人とも交流があり、内藤家には蜀山人が詠んだ歌の直筆の扇面が残っています。

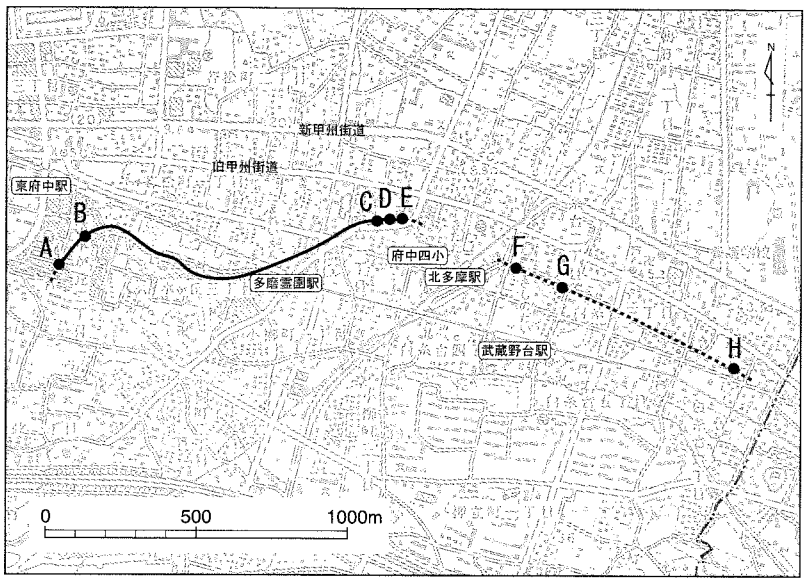
小野宮廟碑は江戸時代後期に建てられたものであるため、古代にまでさかのぼる小野宮の歴史を記した碑文の内容が、すべて正しいとは言えないかもしれません。しかし、人物像こそ明らかにされていませんが、江戸時代に府中市域の歴史を調べ、日本の歴史との関係性を解釈し、導き出した結論を形にしたという点で、重喬は注目に値します。そればかりか、府中市域の出来事の記録者、そして文化人としても評価すべき存在といえるでしょう。　（佐藤智敬）

※参考文献　内田信之「小野宮廟碑　その建碑に関わる人々」（『府中市立郷土館紀要12』　1986）

最近の発掘調査

白糸台でムダ堀の延長部を発見？

白糸台一丁目　府中市ふるさと文化財課　湯瀬　禎彦



今回は、これまでに本誌上で何度か紹介してきた「ムダ堀」についての新たな発掘情報を紹介します。

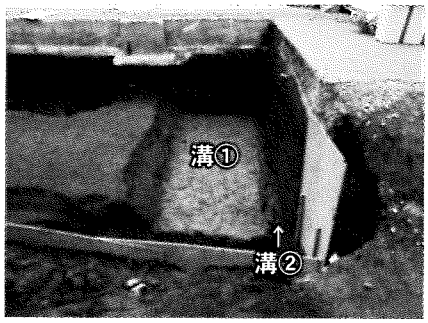
ムダ堀とは、かつて市内の清水が丘から白糸台にかけての台地上に存在した、玉川上水掘削の失敗跡との伝承を持つ帯状の窪地のことです。これまでに４か所（図Ａ～Ｄ）で発掘調査が行われ、Ａ地点では幅14m、深さ５ｍの大規模な溝が、Ｄ地点ではそれよりも規模の小さい幅7.5m、深さ1.2mの溝が確認されています。

さて今年５月、Ｄ地点の東隣りのＥ地点での発掘調査によって、ムダ堀に関連しそうな新たな溝が発見されました。発見されたのは南北に重複する２条の東西溝です。出土遺物からは北側の溝（溝①）が中世以降に埋まり、その後、溝①の南側に、より深い溝（溝②）が掘られていることがわかりました。

溝①はＣ・Ｄ地点の溝とほぼ同じ深さで、形状も似ているため、これまでの考え方だと溝①がムダ堀の延長部分となります。しかし、ここで注目されるのは、新たに発見された溝②です。溝②はわずかな部分しか確認されませんでしたが、溝①よりも確実に深い溝で、Ａ地点で確認された大規模な溝の姿により近い可能性があります。つまり、Ａ・Ｂ地点から続く本来のムダ堀のルートとして、Ｃ・Ｄ地点のすぐ南側の未調査地域を通り、Ｅ地点の溝②に繋がるルートも考える必要がでてきたのです。

また、そのように考えた場合、ひと続きと思われるＣ・Ｄ地点の溝とＥ地点の溝①の扱いも問題となります。これらの溝は、ムダ堀の延長部の可能性も指摘されている、Ｆ～Ｈ地点の東西溝に繋がる可能性が考えられます。こちらの溝は、北側にある旧甲州街道とほぼ並行しており、これとの関連性を考える必要もありそうです。

ムダ堀については、江戸時代後期の絵図をもとに、大國魂神社のすぐ東側からハケに沿ってＡ地点に繋がるルートも推定されています。今回のＥ地点から東側ではどのような状況になるのか。そもそもその性格はどのようなものなのか。ムダ堀にはまだまだ解明すべき謎が数多く残されているのです。

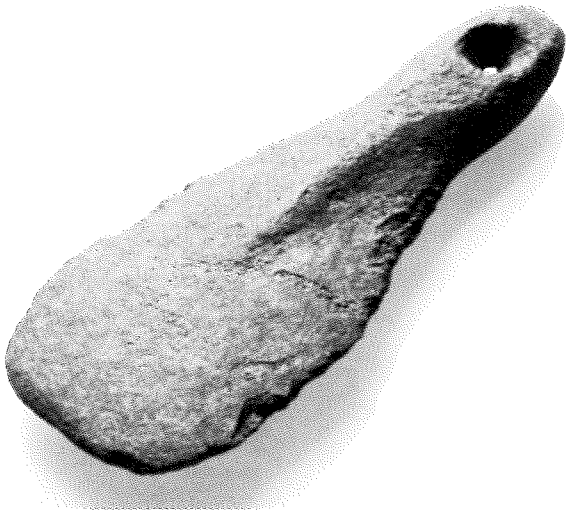


今回発掘された溝

溝①が埋まった後に溝②が掘られています。溝②の大半は南側（右側）の道路の下に埋もれているのかもしれません。これまで溝①がムダ堀と考えられてきましたが、溝②こそムダ堀である可能性が出てきました。

収蔵資料あれこれ

縄文時代の珍奇な石製品



武蔵台遺跡出土の「石鍬」

府中市の北端近くに武蔵台遺跡という遺跡があります。都立多摩総合医療センターの構内を中心に広がる遺跡で、都内最古級の旧石器時代遺跡、そして縄文時代早期の大規模集落遺跡として、研究者の間ではよく知られています。また、奈良・平安時代の遺跡も重複していて、武蔵国分寺の関連遺跡としても著名です。このようにさまざまな時代に及ぶ武蔵台遺跡の出土品は、当館が収蔵する考古資料の核となっていて、機会ある毎に展示公開してきました。

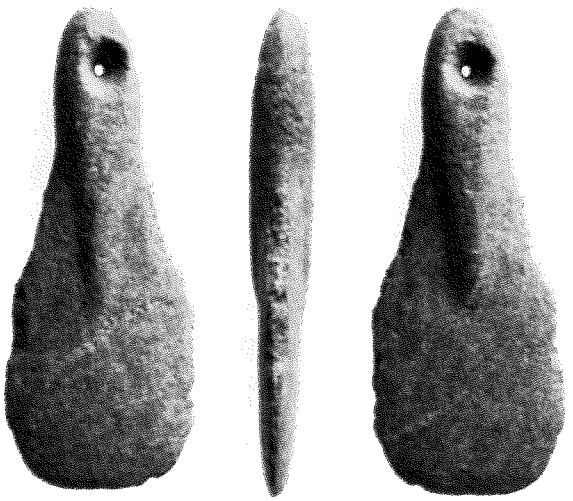
しかし、今回紹介する石製品は、珍品でありながら、これまでに展示したことのない資料です。1996年の発掘調査での出土品で、結晶片岩を素材としていて、ほぼ全面が研磨されています。特異なのはその形状で、断面楕円形の柄があり、その下部は扁平な板状をしていて、柄のような上部の端には直径4.5cmの孔が穿たれています。大きさは、長さ20.5cm、扁平な下部の幅は最大で8.0cmです。

この特種な形状の石製品は関東地方ではまず目にすることはありませんが、今から70年も前に、農具の鍬に似ていることから「石鍬」と名付けられ、学界報告されたものと同類です。しかも70年前には、弥生時代の遺物と推測されています。

しかしながら、今もって、この「石鍬」と呼ばれた石製品の出土数は僅かで、いつの時代の遺物なのかという基礎的な事がらすらはっきりしていません。

ところが武蔵台遺跡では、この「石鍬」は縄文時代の前期後半や中期前半の土器とともに、縄文時代の土層から出土しています。周辺には弥生時代の遺跡は皆無ですから、むろん、弥生時代の遺物が混入した可能性も考えられません。武蔵台遺跡出土品は、この謎の「石鍬」が縄文時代の遺物であることを提起しているのです。実は、東京都内では、多摩市にある多摩ニュータウンNo.789遺跡でも、縄文時代の土層から、「石鍬」の破片が出土しています。こうした確実な発掘調査例からすると、「石鍬」は縄文時代の遺物と考えてまちがいないでしょう。

とはいえ、この「石鍬」の用途はいまだ謎のままです。あらためてこの「石鍬」を観察しても、取り立てて目立つ傷はなく、用途を推測させる手掛かりは見出せません。「石鍬」の用途の解明は、類似資料がもう少し増加するのを待つしかなさそうです。　（深澤靖幸）



「石鍬」の展開写真

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.97 発行日 2011/9/20
編集・発行 公益財団法人府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/